

## 他生の縁

袖ふり合うもたししょうの縁という。この世のほんの行きずりの、偶然に見える関係も、じつはすでに前世で縁を結んだ結果であるという意味の縁である。この「たししょう」は「他生」であろうか、「多生」であろうか。

東海教育研究所発行の『望星』平成九年一月号で榊原昭二氏がこの問題を論じた。氏によれば、「たししょう」の表記に「他生」と「多生」の二つがあるが、「多生」が正しく、「他生の縁」は「多生の縁」の誤用である。わたしは反対に「他生」が正しく、「多生」はその誤用と考えていて、学生にもそういったことがあるので、急速、辞書類を開いてみた。

調べてみると、なるほど多くの辞典が「他生の縁」は「多生の縁」の誤用と書いている。以下、わたしが調べたものをあげてみよう。著者名を付した辞典は初版が戦前にさかのぼるものである。

「他生の縁」を「多生の縁」の誤りとするもの

大槻文彦『大言海』

上田萬年『大日本国語辞典』

落合直文『言泉』

金沢庄三郎『広辞林』

講談社『日本語大辞典』

小学館『日本国語大辞典』

小学館『言泉』

小学館『古語大辞典』

角川書店『古語大辞典』

角川書店『国語辞典』

角川書店『国語大辞典』

岩波書店『古語辞典』

「他生の縁」と「多生の縁」の二つの表記があることに触れるだけのもの

岩波書店『広辞苑』

岩波書店『国語辞典』

学習研究社『国語大辞典』

小学館『大辞泉』

旺文社『成語林』

藤井乙男『諺語大辞典』

小学館『故事・俗語ことわざ大辞典』

平凡社『大辞典』

「他生の縁」のみをあげるもの

山田美妙『日本大辞書』

三省堂『辞海』

雄山閣『故事成語ことわざ辞典』

「他生の縁」は誤りでないとするもの

東京書籍『仏教語源散策』

「多生の縁」を誤りとするもの

主婦と生活社『成語大辞苑』

このように「他生の縁」を誤りとするものが圧倒的に多く、「多生の縁」を誤りとするものは僅かである。仏教思想に親しむものにとつてこれは納得しがたい。この言葉は仏教の輪廻と業の思想を背景に生れているが、この思想に関する仏教書を読むかぎり、「他生の縁」こそ正しいと思われる。ではこの思想が仏教でどのように捉えられているかを見てみよう。

仏教には「ジャータカ」（本生譚）と呼ばれる経典をはじめ、ブツ

ダや弟子や一般俗人の前世を語る物語がふんだんにある。この種の物語をいくつか紹介してみよう。

(一) むかしヒマラヤの麓にメーガとメーガダッタという二人の若いバラモンの修行者がいた。メーガは修行を終えるとヒマラヤを離れ、遊行の生活に入った。

かれがある町にやってくると、町じゅうが飾りたてられていた。メーガが町の娘にその理由を聞くと、ディーパンカラというブツダを迎えるためであるという答えであった。

メーガは好奇心を起こし、彼女が手にしている蓮華の一部を買って、ブツダの行列を待った。そして、ブツダが近づくと、歡喜の心を起こし、ブツダに花を投げた。また自分の衣をぬいでブツダの足もとに広げてブツダにその上を歩かせ、さらにブツダの前に身を投げて自分の髪でブツダの足の泥をぬぐった。そして、つぎのように誓った。「わたしも人々を幸福にするためにブツダになろう」

ディーパンカラはメーガの心を知り、かれにいった。「メーガよ。そなたは無数の劫を経たのち、シヤカ族の町に生れ、シヤカムニという名のブツダになるであろう」。

メーガは友人のメーガダッタのもとに駆けつけ、ブツダを見に行くように誘った。しかし、メーガダッタは関心を示さなかった。メーガは引き返し、ディーパンカラの僧団に加わった。

メーガダッタはメーガを軽信の徒と考えて軽蔑し、自らは悪友とつきあつて墮落し、五逆罪を犯すまでにいたった。まず人妻に恋し、それを諫めた母を殺した。かれは笑つて恋人にいった。「おまえが好きたから母を殺した」。恋人は恐怖して逃亡した。腹をたてたかれに

継母が近づいて、いった。「あなたの妻になつてあげるから、あなたのお父さんを殺しなさい」。かれは父を殺した。かれは近所のつまはじきものになり、かれを知るもののない町へ移つた。そこへたままたまかれを知る比丘がやつてきた。メーガダツタは自分の悪事が露見するのを恐れ、ブツダに傷を負わせた。こうしてかれは五逆罪のすべてをおかし、地獄におち、無数劫のあいだ地獄をへめぐつた。そしてメーガがシヤカ族の王子に生れ変わったころ、かれは巨大な怪魚ティミティミンギラに生れ変わった。

あるとき飢えて苦しんでいるティミティミンギラの前に一隻の商船が現われた。かれは船を呑みこもうと口をあけて待ちかまえていた。船が目の前に近づいたとき、かれは狂喜の声をあげた。「おまえたち、もう逃げられないぞ」

商人たちは助けを求めてめいめい自分が信じる神の名を唱えた。あるものはシヴァの名を、あるものはインドラの名を、あるものはブラフマーの名を。しかし、ティミティミンギラはそれらの声に心を動かさなかつた。

商人の中に仏教の在家信者がいた。かれの知人であるブルナカ尊者が遠くからかれの危機を察知し、神通力で船の上まで飛んできて、かれにブツダの名を唱えるようにいった。かれは他の商人たちとともに「ナム・ブツダ」と唱えた。

ブツダという声がティミティミンギラの耳に届いた。かれはむかしこの言葉を友人のメーガから聞いたことがあるのを思いだした。かれは思った。「ああ、新しくブツダが生れたのだな」。かれは深い思いにとらわれ、静かに口を閉じた。そしてブツダの名を想念しつ

つ、飢えて死んだ。

その後、かれはバラモンの家に生れ、ダルマルチと名づけられた。かれは成長して、シヤカムニの弟子となり、修行にはげみ、日に三度、ブツダのまえに出る機会をもつようになった。ブツダはかれに会うたびにいった。「長かつたなあ、ダルマルチ。長かつたなあ、ダルマルチ」。ダルマルチが答えた。「本当にひさしぶりです、世尊よ。本当にひさしぶりです、世尊よ」。

比丘たちはその会話を耳にして、不審に思った。「ひさしぶりとは、いったい何だろう」。比丘たちの心を知つたブツダはかれらに前世のできごとを語つて聞かせ、「そのときのメーガがいまのわたしなのだ。そのときのメーガダツタがいまのダルマルチなのだ」といった。  
(「マハーヴァストゥ」より)

(一) 舍利弗がブツダの説法を聞いて、いった。「わたしはいま始めてこの無上の教えを聞きました」。ブツダがかれにいった。「舍利弗よ。そなたが無上道をいま始めて聞いたようにいうのは正しくない。そなたは忘れてるが、そなたは二万億のブツダのもとでわたしから無上の法を聞きつづけたのだ。その因縁でそなたはこの世でわたしとまた縁を結び、無上道を理解することができたのだ」(「法華経」譬喩品より)

(二) 西暦二世紀にバルチア国から安世高という在家仏教信者が中国にきた。かれはいった。「わたしは先身でバルチア王の息子でしたが、ある若者とともに出家しました。この若者は短気で、乞食のとき氣にいらぬことがあるとすぐ怒りました。わたしはそのつどかれを

たしなめ、かれはそのつど反省しましたが、かれの性格は変わりませんでした。

かれと二十余年をともに過したあと、わたしは宿世（前世）の業の報いを受けるために中国にまいりました。そして広州で一少年に殺されましたが、そのときわたしは少年にいいました。『わたしはあなたに殺される運命を負っていた。だからわたしはここへきた。あなたの殺意は前世に作られたものである。』わたしは殺され、ふたたびバルチア王の息子に生れました」

その後、安世高は郡亭湖に赴いた。湖には蛇神を祭る靈驗あらたかな廟があった。安世高が乗った船が廟に近づくと、蛇神がかなんぎの口を通していった。「その船に沙門がいる。かれをここに案内せよ」

船人たちが驚いていると、蛇神が安世高にいった。「わたしは昔あなたとともに出家したものです。短気だったので蛇神に生れ変わってしまいました。わたしはこの醜い姿を脱したい。どうかわたしのために塔を建て、法事を営んで下さい」

安世高が「昔の友よ、姿を現わせ」というと、大きな蛇が現われ、顔をかれの膝に寄せて涙を流した。二人は胡語で会話したので、周りの人には理解できなかつた。安世高は豫章へ赴いて塔を建て、また船に乗った。すると船上に一人の若者が現われ、安世高に謝辞を述べて、姿を消した。これは蛇が命を終えて若者に姿を変えたものだった。このち廟には神は現われなくなり、靈驗もなくなつた。

安世高は広州にきて、前世でかれを殺した少年を探した。少年は六十余才になって生きていた。安世高がかれの家に投宿し、前世の出来事を語ると、かれは安世高に深く詫びて、かれを厚くもてなし

た。（この「前世の出来事」は安世高にとっては前世だが、「少年」とっては現世である）

安世高は自分にまだ業が残っていることを知り、その報いを受けるために会稽へ赴いた。果せるかな、かれはそこで乱闘に巻きこまれて命を終えた。（『出三蔵記集』より）

これらの物語を通じて知られるのは、仏教ではこの世の出来事は前世にその原因を持つと考えられているということである。前世を経験した回数は問われない。（三）には先身、前世という言葉が現われるが、いずれも一つ前の生をさしているだけである。（二）の例では、「そなたは二万億の仏のもとでわたしから無上の法を聞きつづけた」とあって、多くの回数への言及があるが、しかし、これは無上道を理解するという特別困難な場合だからであろう。

では「たしよのえん」という熟語はこの熟語の初出の文献ではどのような漢字で記されたのであろうか。上掲の辞典類は、この熟語の最も古い典拠として『平家物語』をあげている。そこで岩波書店『日本古典文学大系』の『平家物語』を見ると、その福原落に「一樹の陰にやどるも先世の契あさからず、同じ流れをむすぶも、多生の縁猶ふかし」とある。辞典類はまた『平家物語』より新しい典拠として『太平記』頼員回忠事の「一樹の陰に宿り、同じ流れを汲むも皆是れ多生の縁あさからず」をあげている。どちらの典拠においても「多生」と記されている。

ただし、岩波版『平家物語』下の二一四頁注一〇には「多生」の語を説明して、「他生が正しい。今生（こんじょう）に對し、過去、

未来の生をいう」とある。また、岩波書店『古語辞典』では「一樹の陰に宿るも先世の契り浅からず、同じ流れをむすぶも、他生の縁なほ深し」となっている。

つぎに、「たししょう」の語のみの例を調べると、つぎのものがある。謡曲「敦盛」の「身は成仏の得脱の縁、是れまた他生の功力なれば、日頃は敵、今はまた、真に法の友なりけり」。『一遍上人語録』の「此世の対面は多生の芳契」。

結局、古い文献においても、「他生」と「多生」の両方が見られる。古い時代にすでに二つの書き方があったのか、あるいは古い時代にはどちらか一つであったのが、書写されるうちに書き誤られたのか。これでは本来「他生」であったか「多生」であったか、依然として不明である。

しかし、本来「他生」であったらうと推測しうる手がかりがある。『平家物語』からの右の引用文中に「先世の契あさからず」と「たししょうの縁ふかし」の二句がある。この二句は同じことを言葉を変えていったもの（一種の対句）と思われる。すなわち、「先世」は「たししょう」に、「契」は「縁」に、「あさからず」は「ふかし」に対応する。とすれば、「たししょう」は「他生」でなければならぬ。なぜなら「先世」の同義語といえるのは「他生」であって、「多生」ではないからである。

しかし、「あさからず」という表現は「たししょう」を「多生」と思いあやまらせる結果を生んだかもしれない。この表現は量の多さを連想させるからである。

では、文献学的にはどうであろうか。岩波の『平家物語』の福原落には「一樹の陰にやどるも先世の契あさからず、同じ流れをむす

ぶも、多生の縁猶ふかし」があり、同、千手前（岩波、下、二六五頁）には「一樹のかげにやどりあひ、おなじながれをむすぶも、みなこれ先世の契」がある。すなわち、「一樹の陰」や「同じ流れ」という句がくりかえされている。ところが、岩波の『平家物語』の注（上、九八頁、注二二、下、一一四頁、注九）には『説法明眼論』という書物があげられ、この書から「或いは一村に処り、一樹の下に宿り、一河の流れを汲むは（中略）皆是れ先世の結縁なり」という言葉が引用されている。『説法明眼論』と『平家物語』のあいだに借用関係があることは明らかである。

では『説法明眼論』と『平家物語』はどちらが古いのであろうか。両者とも正確な成立年代は不明である。『説法明眼論』については金沢文庫に円通という人が著わし、文永五年（一一二六）に湛睿という人が書写したことを記す写本があり（注一）、高野山図書館に永享六年（一一三四）に宥賀という人が書写したことを記す写本がある。岩波書店『国書総目録』の〈説法明眼論〉の項に「聖徳太子作と仮託する説あり」とあるが、この説をそのまま信じることはできないにしても、『説法明眼論』がかなり古い書物であることが窺われる。

一方、『平家物語』は、岩波版の解説によれば、一三世紀の初頭に原形が作られ、その後次第に詞章の増補を見、二、三十年後に現在のような十二巻形態に進んだようである（上、四七頁）。岩波版が底本としたのは覚一（一三七一死）が用いた本の転写本である（五一頁）。これらのことを勘案すると、『説法明眼論』のほうが古そうである。しかし、決定的なことはわからない。

そこで内容を比較してみよう。『説法明眼論』につき文がある（注二）。原文は漢文であるが、書き下して示そう。

まさに知るべし、先世の授戒の師は今世の父母となり、先世の授戒の祖師は今世の祖父となり祖母となる。過去の同学は現在の兄弟となり、過去の同聴は現在の姉妹となる。其の一師において別所にして戒を受くるは今世の兄が子となり弟が子となり、姉が子なり妹が子なり。先世の師と同学とはまた今世の内外の（Ⅱ父方、母方の）叔父となり叔母となる。或いは知識となり、或いは師弟となり、或いは同行となり、或いは伴侶となり、或いは同姓となり、或いは同学となり、或いは同僚となり、或いは一国に坐し、或いは一郡に住し、或いは一縣に處し、或いは一村に處し、一樹の下に宿り、一河の流れを汲み、一夜の同宿一日の夫妻となり、一所にして聴聞し、暫時の同道、半時の戲笑、一言の會釋、一坐の飲酒、同盃同酒、一時の同車、同暈、同坐、同床の一臥、軽重に異あれば親疎に別ありといえども、みな是れ先世の結縁なり。

『説法明眼論』と『平家物語』は「一樹」「一河」などの表現を有することに於いて同等である。しかし、「先世の結縁」の意義を強調することに於いて『説法明眼論』のほうがはるかに徹底し、こちらの方がオリジナルであることを感じさせる。

また『説法明眼論』（金沢文庫本、高野山図書館本）は漢文であり、『平家物語』（覚一本）は漢文平仮名まじり文である。漢文平仮名まじり文が先にあつて、それが漢文にされるといふことは考えにくい。このことは享祿四年（一五三〇）頃に書写された漢文片仮名まじりの『平家物語』の写本についても同様である。

この享祿書写鎌倉本『平家物語』（古典籍複製叢刊行会編、雄松堂、昭和五十五年）の場合、「福原落」の問題の文はつぎのようにな

っている。「一樹ノ陰ニ宿モ先世ノ契淺カラス同流ヲ瀧モ多生ノ縁尚モ深シ」。瀧は掬（すくう）の誤りであろうか。そして掬を「汲む」と読ませたのであろうか。『説法明眼論』には「汲む」とあるので、そのように推測できる。このことも『説法明眼論』の先行説を支持する。ちなみに、覚一本と享祿本が異なる漢字（猶、尚）を使っているのは、『平家物語』が口伝から文字化されたことを表わすのであろう。

いずれにしても『説法明眼論』がオリジナルであり、『平家物語』はその一部を借用したのだと考えられる。その『説法明眼論』に「あさからず」という表現はない。むしろ「先世」における一回の結縁に言及するのみである。そして「他生」という言葉も「多生」という言葉もない。したがって『平家物語』は『説法明眼論』の文の趣意をとったということになろう。

こうして、『平家物語』の「先世の契」や「たしよの縁」は『説法明眼論』の「先世の結縁」を受けて言い換えたものと考えることができ、これによつて「たしよ」は「他生」であるべきだということが出来る。もし『平家物語』が「先世」を他の言葉に言い換えずに、そのままに借用していたら、後世に「多生」と書き誤られるようなことは起きなかつたらう。「他生」と言い換えたために同音によつて「多生」と書き誤れることになつたといえるだろう。

ちなみに「先世」でも「多くの前生」を含蓄しう。しかし、重要なのは、この世で縁を結ぶのは前世ですでに関係を持つたからということであつて、それは一回でもよいのである。むしろ、一回のほうが冒頭の諺を味わい深くする。それは一期一会という格言と同じように、わずかな縁でも大切にすべきことを教えている。

一方、「多生」という言葉が存在することも厳然たる事実である。たとえば、『平家物語』祇王に「人身は請けがたく、仏教にはあひがたし。此度ないにしづみなば、たしやうくはうごう（多生曠劫）をばへだつとも、うかびあがらん事かたし」（人として生れるのは難しく、仏教に出会うのは難しい。こんど地獄に落ちたら、生死を何度くりかえしても、地獄から脱出することは難しい）とある。この「多生」は「他生」の誤りではない。この語は時間の長さを意味するのであって、縁とは何の関係もない。

注1

納富常夫『金沢文庫資料の研究』昭和五七年、法蔵館、四八二―四八九頁によれば、湛睿は正安二年（一一三〇）三〇才のとき鎌倉浄光明寺において『選択集名体決並念仏本願義』を書写したというから、かれが生れたのは文永八年（一二七二）ということになる。これは『説法明眼論』がかれによって文永五年（一二六八）に書写されたという記録と矛盾する。

注2

この文の少し前に「一日の（尼）師檀は百劫の結縁なり」とあるが、この「百劫」は未来の百劫を意味すると私は考える。尼師檀は本来 *nishāna*（座）を意味するが、ここでは講座を意味するだろう。したがって、右の文の意味は「人々に一日説法してやることは今後かれらと百劫にわたる深い縁を結ぶことだ」であろう。